

残した短歌も魅力が  
ふれている。たとえば「扶  
余にて」とそえられた次  
の一首。

王宮の聖の御子のをさ  
な姿そこらゆく子にふと  
思ひ浮ぶ

現在の韓国中部に位置  
する扶余は6〜7世紀、  
120年余にわたり百濟  
王家の都として栄えた。  
その地を現在行き交って  
いる子供の姿が、かつて  
の百濟の王族の幼子と重  
なってみえると詠む。

1930年刊行の「日  
本地理大系 朝鮮篇(改  
造社)で伯教は「扶余の  
部」の執筆を担当。「我  
が国に渡った飛鳥朝の学  
者・名僧・工芸家ら文化  
人は、こうした環境に育  
まれた事を思ふと一層な  
つかしさを感ぜずには居  
られない」と解説を結ぶ。  
他の執筆者が説明に終始  
する中、伯教だけが異文  
化を自分の身に引き寄せ  
てとらえた。

兄弟の足跡をたどると  
朝鮮への深い愛が感じら  
れる。これからも資料の  
収集・整理を続けながら  
彼らの魅力を発信してい  
きたい。(さわや・しげ  
こ)浅川伯教・巧兄弟資  
料館館長)

つけて伯教の初の著作集  
「朝鮮古陶磁論集」全2  
巻をこのほど刊行した。  
著作を改めて読むと、  
真に美を探求する芸術家  
としての伯教が浮かび上  
がる。伯教は美しいもの  
があれば、それを生み出  
す人や風土、文化に当た  
り前のように敬意を払  
う。朝鮮白磁に心打たれ  
た彼は、それを作り出し  
彼らの魅力を発信してい  
きたい。(さわや・しげ  
こ)浅川伯教・巧兄弟資  
料館館長)

って朝鮮に移った巧の家  
で「青花辰砂蓮花文壺」  
に感動。朝鮮民族美術館  
を構想する。

私は大学卒業後、雑誌  
・書籍の編集に就いた。  
その後、東京から山梨に  
移り住み、浅川兄弟を知  
った。現在の北杜市郷土  
資料館の立ち上げに携わ  
っている頃、巧の生涯を  
描いた小説の映画化が決  
まった。制作事務局を務  
め、郷土史考証の立場で  
制作にも関わった。

私は大学卒業後、雑誌  
・書籍の編集に就いた。  
その後、東京から山梨に  
移り住み、浅川兄弟を知  
った。現在の北杜市郷土  
資料館の立ち上げに携わ  
っている頃、巧の生涯を  
描いた小説の映画化が決  
まった。制作事務局を務  
め、郷土史考証の立場で  
制作にも関わった。

私は大学卒業後、雑誌  
・書籍の編集に就いた。  
その後、東京から山梨に  
移り住み、浅川兄弟を知  
った。現在の北杜市郷土  
資料館の立ち上げに携わ  
っている頃、巧の生涯を  
描いた小説の映画化が決  
まった。制作事務局を務  
め、郷土史考証の立場で  
制作にも関わった。

私は大学卒業後、雑誌  
・書籍の編集に就いた。  
その後、東京から山梨に  
移り住み、浅川兄弟を知  
った。現在の北杜市郷土  
資料館の立ち上げに携わ  
っている頃、巧の生涯を  
描いた小説の映画化が決  
まった。制作事務局を務  
め、郷土史考証の立場で  
制作にも関わった。

## 沢谷 滋子

◇朝鮮総督府時代 優れた鑑賞眼で古陶磁愛した日本人◇

# 白磁の美伝えた兄弟追う

兄の伯教については手  
収集して白磁の歴史と成  
り立ち、日本との関係を  
本にまとめた。敗戦で日  
本に引き揚げるまでに訪  
ねた窯跡は700カ所余  
り。集めた陶片は10万片  
を超えたと思われる。  
伯教は朝鮮に渡った翌  
年、朝鮮白磁を手土産に  
心を奪われ、古陶磁の研  
究に没頭していき。



◇◇  
柳宗悦「開眼」の契機  
窯跡を求めて朝鮮半島  
中を訪ね歩き、打ち捨て  
られた膨大な数の陶片を



白磁「青花辰砂蓮花文壺」(大阪市立東洋陶磁美術館蔵、六田知弘撮影)

魅力に開眼した柳は後に  
度々朝鮮に渡る。兄を追  
う。伯教は美しいもの  
があれば、それを生み出  
す人や風土、文化に当た  
り前のように敬意を払  
う。朝鮮白磁に心打たれ  
た彼は、それを作り出し  
彼らの魅力を発信してい  
きたい。(さわや・しげ  
こ)浅川伯教・巧兄弟資  
料館館長)

は後に小説や映画にもな  
った。「朝鮮の膳」「朝  
鮮陶磁名考」などの著書  
を残し、朝鮮を愛した日  
本人として現地の教科書  
でも紹介されている。亡  
くなった時には棺を担ご  
うとする朝鮮人の友人が  
列をなしたという。

現地の教科書で紹介  
兄弟については歴史学  
者の高崎宗司氏の研究が  
詳しい。私は兄弟の故郷  
である山梨県北杜市にあ  
る資料館の館長として、  
氏が寄贈した資料を整理  
し、その業績や思想に改  
めて迫ろうとしている。

高崎氏が「朝鮮の土と  
なった日本人」(草風館)  
にまとめた弟の巧の生涯



右から浅川伯教、柳宗悦、浅川巧(1928年、朝鮮の鶏龍山で窯跡を訪ねて、浅川伯教・巧兄弟資料館提供)



白磁「青花辰砂蓮花文壺」(大阪市立東洋陶磁美術館蔵、六田知弘撮影)

魅力に開眼した柳は後に  
度々朝鮮に渡る。兄を追  
う。伯教は美しいもの  
があれば、それを生み出  
す人や風土、文化に当た  
り前のように敬意を払  
う。朝鮮白磁に心打たれ  
た彼は、それを作り出し  
彼らの魅力を発信してい  
きたい。(さわや・しげ  
こ)浅川伯教・巧兄弟資  
料館館長)

魅力に開眼した柳は後に  
度々朝鮮に渡る。兄を追  
う。伯教は美しいもの  
があれば、それを生み出  
す人や風土、文化に当た  
り前のように敬意を払  
う。朝鮮白磁に心打たれ  
た彼は、それを作り出し  
彼らの魅力を発信してい  
きたい。(さわや・しげ  
こ)浅川伯教・巧兄弟資  
料館館長)

右から浅川伯教、柳宗悦、浅川巧(1928年、朝鮮の鶏龍山で窯跡を訪ねて、浅川伯教・巧兄弟資料館提供)

白磁「青花辰砂蓮花文壺」(大阪市立東洋陶磁美術館蔵、六田知弘撮影)

白磁「青花辰砂蓮花文壺」(大阪市立東洋陶磁美術館蔵、六田知弘撮影)

白磁「青花辰砂蓮花文壺」(大阪市立東洋陶磁美術館蔵、六田知弘撮影)

白磁「青花辰砂蓮花文壺」(大阪市立東洋陶磁美術館蔵、六田知弘撮影)